

150年の節目に日台の「出会い」台湾出兵・牡丹社事件の意味を問い直す

大東文化大学教授／ジャーナリスト 野嶋 剛

明治維新を経て、近代国家に生まれ変わった日本は、どんな国になりたいのか、あるいはなっているのか。国家の羅針盤が定まる前の出来事だった。

1871年、沖縄・宮古島から出港して、那覇からの帰路に漂流し、台湾南部に漂着した船の乗員54人が、台湾南部の先住民地域で殺害された。「懲罰」を理由に、1874年、台湾への出兵が決まった。明治政府は、それまでの征韓論から征台論に舵を切ったのだった。予想していなかった英米の不支持でいったんは出兵方針が凍結されかけたが、派遣軍の長に任じられていた台湾蕃地事務都督西郷従道中将は独断専行で兵を率いて長崎から台湾へ出発し、明治政府も追認した。

現屏東県恒春半島の石門という場所で、先住民パイワン族と日本軍との戦闘行為が発生し、双方に死者を出した。パイワン族は牡丹社という地域の人々で、本件を台湾側が「牡丹社事件」と呼ぶ理由にもなっている。清朝政府は事態を重く見て台湾に向けて軍船を派遣し、日本の現地での行動拡大を抑え込んだ。北京での交渉の末、清朝が日本軍に事実上の賠償金を支払う代わりに、日本軍が台湾から撤兵することで事態はいったん結末を見た。

新生・日本にとって、初めての海外派兵であり、清朝や欧米が絡んだ本格的な海外との紛争だった。当時は「征台の役」と呼ばれ、「台湾事件」との呼称もあったが、今日は「台湾出兵」という呼称が日本で定着している。一方、台湾では前述のように「牡丹社事件」と呼ばれる。

それから長い時を経て、いま150年という節目の年を迎えるにあたり、当時の東アジア情勢、日本の国内政治、台湾の運命にも多大な影響を及ぼしたこの軍事行動の重要性を改めて問い直した

い。そんな思い抱いた研究者・ジャーナリストらで「台湾出兵・牡丹社事件研究会」を立ち上げ、2022年から1－2ヶ月に一度のペースで新橋の貸し会議室を使いながら勉強会を重ねてきた。

その成果を発表する形で、2024年3月、2日間にわたって国際シンポジウム「台湾出兵・牡丹社事件150年 交錯する日台の視座」を早稲田大学台湾研究所と共同で開催した。本稿はその概要を紹介しつつ、この国際紛争について改めて論じる意義を解説するものである。

昨今、日本と台湾の関係は、好意的な相互感情に支えられて交流は活発化している。日本において台湾に関する研究や著作も増加の一途を辿っており、学術交流から観光に至るレベルまで、台湾への関心は高まる一方である。国会議員や地方議員の台湾訪問も急増し、1972年の断交以来、非公式関係ではありながら、日台関係はかつてない良好な状況にあると言えるだろう。

そんななかだからこそ、日台関係の出会いであり、「原点」ともいえる出来事を見つめ直し、およそ半年間におよぶ出兵期間に台湾で何が起きたのかについての解像度を上げながら、1895年から50年間に及んだ日本の台湾統治の前にも日台の間には「歴史」があったことを知ってもらいたいと考えた。シンポジウムという場へ、日台、そして沖縄の関係者が最新の研究成果や知見を持ち寄り、歴史への理解を促進する建設的な議論を行い、社会に向けて発信することを目指した。

研究会のコアメンバーは、代表の春山明哲・早稲田大学台湾研究所招聘研究員、中央大学の松永正義氏という2人のベテラン研究者に加えて、『マブイの行方』の著書があるノンフィクション作家

の平野久美子氏、明治政府の台湾出兵決定プロセスについて多くの論文を執筆している武蔵野大学の後藤新氏、台湾出兵を影で動かした米国人外交官ルジャンドルの研究がある明治大学の羽根次郎氏らで構成され、私が事務局長の任にあたった。

シンポジウムの開催にあたっては、台湾出兵の決定を行なった当時の明治政府の重鎮で、台湾蕃地事務局長官の任にあった大隈重信が開設した早稲田大学を会場とした。りそなアジア・オセアニア財団や日本台湾交流協会からの会議助成を頂戴したおかげで、台湾や日本各地から多彩なゲストを招聘でき、東京における台湾出兵関係史跡などを訪れるエクスカージョンのツアーも開催した。

シンポジウムの初日は、春山氏による台湾出兵をめぐる研究の現在地や研究の意義についての解説があり、午後からは台湾から招いた2人のゲストが基調講演を行った。基調講演の1人目は、日本でも多くの著書が刊行されている作家の陳耀昌氏で「台湾出兵と牡丹社事件は150年の台湾史にいかなる影響を与えたか」と題した内容だった。2人目は、英国エディンバラ大学から台湾に返還された牡丹社の戦士の頭骨返還に携わった台湾・中央大学の胡川安氏であり、「英エディンバラ大学から牡丹社・パイワン族兵士の頭骨が変換された歴史的意義」と題した講演で、返還をめぐる交渉と返還に対する先住民社会の受け止め方などを論じた。陳氏の講演については天理大学の下村作次郎氏、胡氏の講演については福岡大学の宮岡真央子氏がそれぞれ詳細なコメントを行った。

また、殺害された琉球民の子孫である仲宗根玄治・医療法人とよみ会理事長を現在の居住地である大分から招聘し、平野氏とのトークセッションを行って、「琉球・宮古島の視点と語り継がれる歴史」という視点を聴衆に披露した。

二日目は主に研究会の各メンバーによる研究成果の発表が行われた。主軸としたのは「人物からみた台湾出兵」という視点であった。台湾出兵・牡丹社事件に関わった人々は、日本、欧米、清朝の各方面にちらばっている。それらの「目撃者」の証言から、当時の人々がこの歴史的事件をどのように見ていたのかを問い直した。

発表は、羽根氏の「ルジャンドルの“Boutan”

叙述が問いかけること—エスニックな台湾出兵理解への困惑」、後藤氏の「台湾出兵における大久保利通と大隈重信」、春山氏の「エドワード・ハウスと『征台紀事』—アメリカからの視線—」、野嶋の「日本初の海外従軍記者・岸田吟香と草創期日本メディアの視線」の4件で、各発表に対して松永氏がコメントを行った。

その日の午後には大型バスを借り切ったエクスカージョンがあり、40人が参加して座席はほぼいっぱいになった。最初の訪問先は靖国神社。意外に思われるかもしれないが、同神社の資料館である「遊就館」には、明治大学の絵師・下岡蓮杖作の大型パノラマ画「台湾戦争図」が収蔵されている。原画は保村状態がよくないため、靖国神社権禰宜の野田安平氏の協力で、同館で作成した原寸大の複製図をわざわざ倉庫から取り出して見せていただいた。

戦争には、兵士だけではなく、ロジスティックスなどを担う民間の人々も多く参加する。台湾出兵に参加した日本兵は軍人・軍属あわせて3600人がいたとされるが、そのなかで雑役を受け持った人々も、兵士同様、マラリアなどの熱帯病にかかって多数が命を落とした。その人々を慰霊する碑文が墨田区両国の回向院にあり、碑文の解説をもとに解説をおこなった。

続いて訪れたのは北区田端の大龍寺で、ここには台湾出兵に従軍した米国人ジャーナリスト、エドワード・H・ハウスの墓がある。日本を気に入って、日本で生を全うしたハウスの生涯について理解を深める機会となった。最後の訪問先は、岸田吟香の墓地がある台東区の谷中霊園で、岸田吟香の書を台湾から持参した陳耀昌氏による挨拶でエクスカージョンを締め括った。

当初は二日間で100人程度の参加者を目標にしていたが、200人を超える参加者が集まった。エクスカージョンも含めて、人を集めるという意味では、予想以上の反響を得ることができた。事前にはSNSを活用した告知を工夫し、登壇者に台湾から知名度のある人物を招聘したことも功を奏したと考えている。また、シンポジウムの開催はメディアが幅広く取り上げ、事前に台湾の中央通信社、NEWSLENS 日本版、Yahoo! ニュースな

どで報道され、当日もメディアの取材があった。

ここからは台湾出兵の位置付けについて、個人的な考えを記したい。

昨今、台湾においては「台湾史」の発掘作業が活発に行われている。背景には民主化以前の「中国史」中心の歴史観から、台湾を主体とするアイデンティティ意識の変化のもと、台湾自身の歴史を知ろうというムーブメントが広がっているからだ。

台湾の書店を訪れると、台湾史に絡んだ多くの著作が本棚に並んでいる。研究界のみならず、一般向け歴史叙述においても、本シンポジウムのゲストとして招いた陳耀昌氏の一連の著作に代表されるように、台湾史研究のトレンドは、これまであまり焦点があたっていなかった「日本以前、鄭成功以後」に光を当てているように見える。

本シンポジウムのなかで、私自身も大きな学びになったのが、陳氏の講演のなかで紹介された「二つの外国船の遭難が『二つの台湾』を『一つの台湾』に変えた」という歴史理解の方法である。

1860年以降、清朝と英仏が結んだ条約によって台湾の台南など四つの港が対外開放された。以来、欧米各国の商船が台湾を訪れる機会が増えて、台湾は次第に国際交易の体系に組み込まれていった。そのなかで、1867年に米商船「ローバー号」が台湾南部で座礁し、半国人乗員らが殺害され下処理をめぐって米国が軍隊を派遣することになり、結果として先住民族パイワン族と米国との間で事件処理に関する「南岬の盟」が結ばれた。台湾にはこの「南岬の盟」を台湾の歴史上最初の国際条約ととらえる意見もある。

次に1871年に琉球漂流民の殺害事件が起きる。そして1874年の台湾出兵へとつながっていく。この米国、日本との紛争は、国際交易が東アジアで活発化するなかで、台湾の海上交通上の重要性が増大した結果でもある。それまでは、事実上自らの統治が及んでいると清朝も明確に認識していなかった「もう一つの台湾」である台湾の東半分の先住民地域に対する統治の強化を「二つの遭難」が清朝に思い至らせる結果となる。

台湾出兵の事後処理として日本と清朝との間で結ばれた「北京専約」では「当該の生番の処分については、中国が自ら法を設けて適切に対応する

ことを約し、永久に航行客が被害を受けないようにする」という条項が結ばれている。

その約束を果たす形で、台湾に派遣された清朝軍と先住民との間で起きた戦闘をきっかけに、清朝が先住民地域まで統治範囲を伸ばしていく「開山撫番」が実現していく。それは、それまで「他界」だった台湾の東半分を「清朝の領土」へ飲み込んでいくプロセスであり、のちの清朝による1885年の「台湾省」の設置へつながっていく。

先住民地域への「消極統治」から「積極統治」への切り替えであり、清朝は台湾防衛を強化するために砲台を設置し、海禁を解除して移民を奨励する。この台湾省の設置がなければ、1895年の台湾の日本への割譲もなかったかもしれない。確かに「2つの遭難」は、のちのちの台湾の運命を考えると非常に重要な時期であり、台湾が一つの主体として歩む今日の政治の原点にもなった。

だが、これまでは台湾出兵や日本統治の開始が、歴史的縦軸を伴って語られることはほとんどなく、筆者の歴史理解にもそうした認識は乏しかった。あたかもある日突然、日本が台湾統治を始めたかのような歴史記述は、より時代の縦軸をもって理解されるべきだとインスパイアされた。

台湾出兵は1874年の単なる一事件ではない。明治政府の文脈からすれば、それがいかに場当たりの対応を積み重ねた末の幸運に恵まれた結末だったにせよ、日本政府の「南進」政策の起点としての「成功体験」となり、のちの帝国主義的路線の起点ともなったと考えることはできる。一方で、清朝との間では、1871年に結ばれた「日清修好条規」のもとに進むかに見られていた「日清連携」が、この台湾出兵で断絶する形になり、清朝の日本に対する警戒心は強まっていく。以後、日清間は敵対ムードとなって朝鮮半島の権益をめぐる「日清戦争」に結びつく。それは、のちの満州国の建国、日中戦争などにつながる日本と中国の対立の半世紀のプロローグと見ることもできるだろう。

また、沖縄を絡めて考えればその重要性はさらに明瞭になる。日本にとって琉球王朝の清朝と薩摩藩への両属性は悩みの種だった。台湾出兵の解決をめぐる日清交渉では、琉球民の保護権を主張

する日本側の主張を清朝が事実上承認した形となり、琉球の統治についての主導権を握ることができた日本政府は、1879年の琉球藩の廃止・沖縄県の設置へと支配を加速させていく。

かように、この台湾出兵は、日本の明治史、日中関係史、日台関係史、中台関係史、沖縄史など各方面からの多義的なアプローチが可能であり、研究面での潜在力を有しているテーマである。にもかかわらず、長年にわたって台湾出兵を取り上げる強度が十分ではなかったことは否めない。今後、この2024年を一つの起点として、日本、台湾双方で、台湾出兵、あるいは牡丹社事件に関する研究熱が高まっていくことを期待したい。

台湾の歴史研究はなお発展途上であり、多くの史実が未発掘であると同時に複数の解釈が混在している。さらに今日的に脚光を集める先住民の歴史も、彼らが文字を持たない民だったゆえに典拠が断片的で乏しい。1871年の漂流民殺害についても、現地の口述と日本政府や琉球王朝の記載とは食い違いがある。

仮に1871年の事件に焦点を当てれば琉球＝被害者、先住民＝加害者の構図だが、先住民にとっては、漂流民が勝手に逃げ出したために起きた悲劇という解釈にもなる。1874年の台湾出兵に焦点を当てると、先住民＝被害者、日本政府＝加害者であり、さらに、日清交渉のなかで清朝政府が琉球に対する管轄権を主張しなかったことで、日本による琉球の併合がより加速したという意味では、琉球は二重の意味で被害を受けたと考えることができるだろう。いずれにせよすでに長い時間が経過したものであり、加害・被害の関係ではなく、歴史的事実の検証や相互交流によってお互いの距離を埋めていく作業が必要であろう。

筆者の個人的研究対象である岸田吟香は、この台湾出兵に東京日日新聞の特派記者として従軍し、同紙に連載「台湾信報」「台湾手稿」など多くの記事を書いた。日本初の戦争報道である。岸田吟香の報道で戦争と台湾がどのように描かれ、日本に伝えられたのかについても、かねてから十分に検証されていないという問題意識で研究に取り組んできた。

ただ一方で、台湾出兵に従軍したジャーナリストは岸田吟香だけではなく、同じ日本人の写真家

として帯同した松崎晋二がいた。さらに米国人ジャーナリストのエドワード・H・ハウスは、岸田吟香以上に派遣軍の中枢に近い形で従軍し、日本軍の様子を著書「征台紀事」という作品に記録している。春山氏の発表を通してハウスの報道の詳細を知り、岸田吟香や松崎晋二もあわせた「ジャーナリストたちが描いた台湾出兵」の解明への研究意欲を刺激された。

今回のシンポジウムは台湾出兵に関する様々な情報を第一線の人々から提供し、この歴史的事件をより詳しく知りたい、というモチベーションに繋がればいいと考えていた。もとより特定の結論を導き出すためのものではなく、台湾出兵に対する研究は宝の山のようなものだとことを知ってほしかった。その目的は一定程度達成できたのではないかと自負している。

今回のシンポジウムを皮切りに、日台双方で台湾出兵に対して脚光を当てる様々な動きが出ていることを最後に紹介しておきたい。5月22日を牡丹社事件記念日と定める屏東県牡丹社では、今年も同日、石門の古戦場跡で記念式典があり、宮古島から犠牲者の玄孫にあたる上里樹市議や宮古島市の大城教育長らが参加し、古戦場の古跡指定を記念する石碑の除幕式もあった。さらに台湾では10月に台湾中央研究院におけるシンポジウム、12月に屏東県政府主催による国際研究講座などもそれぞれ予定されている。

日本でも7月に東京・國學院大学を会場に、東アジア近代史学会2024年度研究大会において、大会シンポジウムとして牡丹社事件／台湾出兵を取り上げる「近代東アジア空間の形成と日本の台湾出兵」が開催された。当研究会からも、春山氏、後藤氏、羽根氏、宮岡氏らが発表者・コメンテーターとして登壇した。そのなかで松金公正・同学会副会長が開催の意義について「1874年に日本が台湾の先住民に行った軍事作戦をどう捉え直すのか、近代の東アジア空間の形成でどう位置づけるかを考える起点にしたい」と述べたことは、台湾出兵に対する検討・研究については、この2024という一年が終わりではなく、始まりの地点となることを強く示すものとなった。